第 12回 文部科学省IB教育推進コンソーシアム関係者協議会 議事要録

- ■日 時:2023年3月24日(金)10:00~12:00
- ■開催方法:ウェブ会議形式(Zoom 会議)

■出席者:

岩崎 久美子 放送大学教授

遠藤 みゆき 関西学院大学教職教育研究センター准教授 <mark>荻野 勉 東京学芸大学附属国際中等教育学校校長</mark> Datta Shammi 日本国際バカロレア教育学会副会長

末吉 弘治 星美学園静岡サレジオ理事長 学園長

青木 一真 東京都立国際高等学校DPコーディネーター(遅刻)

坪谷・ニュウエル・郁子 東京インターナショナルスクール理事長/日本IBアンバサダー 日色 保 日本マクドナルドホールディングス株式会社代表取締役社長兼 CEO

Daniel Reynolds The IB Association of Japan (IBAJ)共同代表

■欠席者:

田村 香江 香美市教育委員会教育振興課学校教育班指導主事

渡辺 寿之 サニーサイドインターナショナルスクール園長/IBヘッド・カウンシル委員

関田 晃 さいたま市立大宮国際中等教育学校 校長

■オブザーバー:

星野 あゆみ 国際バカロレア機構アジア太平洋地域 日本担当地域開発マネージャー

出口 夏子 文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室長 柴田 巌 アオバジャパン・インターナショナルスクール理事長

■傍聴:

国立大学協会

日本私立大学連盟

経団連事務局

■事務局:アオバジャパン・インターナショナルスクール(文部科学省IB教育推進コンソーシアム事務局)

<配布資料>

資料1コンソーシアム事務局活動総括

資料2国際バカロレアの普及促進に向けた検討に係る有識者会議取りまとめの概要

<席上配布資料(※以前の関係者協議会で取り扱われた資料)>

資料0議事次第

席上配布資料 1_文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムについて

席上配布資料 2_関係者協議会構成員名簿

席上配布資料3 令和4年度コンソーシアム事務局活動状況

席上配布資料 4 令和3年度国際バカロレア(IB)を活用した大学進学に関する調査

席上配布資料 6_IB修了生・教員へのインタビュー記事(今年度掲載事例)

席上配布資料 5_IB 教育導入サポーター名簿

席上配布資料 7 Air Campus ファシリテーター名簿

席上配付資料8第8回国際バカロレア推進シンポジウム案内

議事

- (1)コンソーシアム事務局活動総括
- (2) その他

■開式

(1)令和4年度コンソーシアム事務局活動状況

※事務局から、資料1に基づいて説明

1. 文部科学省IB教育推進コンソーシアム運営業務

(構成員からのコメント)

坪谷構成員:

191 校ということで、事務局の皆さま5年間ご苦労様でした。

日色構成員:

企業経営のサイトから参加させていただきましたが、IBの価値を様々なステイクホルダー(学校・自治体等)理解していただき取り組んでいただくことは大変なことと思います。また勉強になりました。 その中で、丹念に努力をして、このような数値になったことに敬意を表します。

2. 国際バカロレア教育の効果に関する調査研究業務

(構成員からのコメント)

日色構成員:

充実した研究結果かと思います。5年前より高大接続も問題、就職の際でのIB生の能力の評価、企業でどのようなIB生が活躍しているか、IB教育を受けたことによってコンピテンシーにどのような違いがあるかなど調査研究が深まれば、企業が目を向ける。企業が目を向ければ、大学も変わると思いますので、そのような観点からの有識者会議への問題提起なども検討いただければと思います。

岩崎構成員:

企業調査となると、組織だった調査体制が必要になると思いますが、文科省の皆さまにもお心に留めていただければと 思います。

遠藤構成員:

IB普及に尽力された皆さまに敬意を表します。

IB 生が企業でどのような活躍をしているかということですが、本学の IBEC 修了生で、企業に就職した学生がおります。 学生達から就職にあたり IBEC で培った非認知能力等のスキルが、IB 生と同様に培われたというコメントを聞いております。 調査にする際には、IBEC の学生も調査対象としていただければと思います。

3. 国際バカロレア導入を検討する学校等への支援業務

(構成員からのコメント)

末吉構成員:

学校等に支援をいたただきありがとうございます。教員の異動があるため、毎年毎年 IB のワークショップ費用が係る中、支援をいただきありがたいと思っております。

荻野構成員:

SSH 校のようなところに積極的に IB 認定校をつくっていければさらに良いのではないかと思う。まだ IB 認定校でないところへの横展開も考えられるのではないかと思います。これまでは新規の IB 校をつくることへの支援が中心であった認識ですが、今後はすでに IB 校である学校へのさらなる支援も重ねて頂けるとありがたい。 SSH 校かつ IB 校であるスクールの資料などを拝見すると、IB 校であるという事の良さをもっと積極的に伝えていっても良いのではないかと思うことがある。

4. 情報共有プラットフォームの構築・運営業務

(構成員からのコメント)

ダッタ構成員:

教員養成では有効な資料となります。このような研究は、将来に教員となる学生には有益であると思います。 国の委託の中で研究し、そこに大学が関り、結果がでているのは、いいことです。今後も様々な立場の方々に研究を継続いただける事を期待したい。

AirCampus には、今後 IB 校で勤務するかもしれないという立場の方、IB 校で勤務しないかもしれない立場の方、様々なカテゴリの人が登録され、コンソーシアム事務局を中心とした情報のやりとり・蓄積がなされてきた。また様々な立場の人たちからの関心が非常に高いことが確認されている。IB 校ではないけれども IB 校で実施されている教育のあり方を知り、ご自身の教育の現場に持ちかえって改善を試みる人もいるであろうと思われる。コンソーシアム事務局の活動は、新規 IB 校を増やすという目的を超え、日本全体の教育に寄与してきたと考えている。

岩崎構成員:

示唆に富んだご意見ありがとうございまいした。文科省の方々にも様々ご検討いただければと思います。

Daniel構成員:

IBAJの会長2年目となりましたが、4月24日にアオバの文京キャンパスで、日本中のIB校の学校長が集まるイベントを開催します。ぜひ多くの方にご参加いただきたいと思います。

5. シンポジウムの開催業務

(構成員からのコメント) なし

(議事次第の全体を通じての構成員からのコメント)

遠藤構成員:

2点ご報告と、1点課題共有を致します。

まず IB 実習に関することで、今年度は一条校の IB 認定校に実習生を受け入れて頂く事ができ、感謝申し上げます。インターナショナルスクールの IB 校での実習と一条校の IB 認定校における実習は、それぞれに特色があり学びがあったようです。大学側からも何か貢献できればと思い、本学の IBEC 教員が、実習先スクールの保護者さまの進路相談に乗ったり、教員の皆さまとの情報共有をする取り組みもおこなった。今後、より多くの IB 校と、このような協力関係を築ければと思っている。

次に、本学の IBEC 修了生の進路について、本学では 1 期生が修了したばかりだが、そのほとんどが大学院に進学をし、一部が IB 校の教員として採用され、一部が本会議冒頭でご報告した通り企業に就職致しました。大学院に進学した修了生の中には、教員免許および IBEC 認定証を両方もっているために非常勤講師として採用したいと IB 校からお声がけをいただいた者がいた。今後、一条校の IB 校でも IBEC の価値が広く認識される事を期待したい。

最後に課題の共有です。今後、教員研修に IBEC 受講を研修オプションの 1 つに入れていただきたい。ただ教員が参加するには、学位やプログラムを取得するという形でなければならないため、少なくとも 1 年の休職を余儀なくされてしま

う。現場にいながら IBEC 受講が可能となるよう文科省・IBEC の関係者で検討いただけないでしょうか。

末吉構成員:

現場の立場から、探究的な学びは、子ども達のみならず保護者が高く評価している事を申し上げたい。保護者向けのアンケート結果では、「子ども達がこんなにプレゼンテーションできるのか」「こんなに学びを継続できるのかと驚いた」などという声が目立つ。

また、英語教育に関しては、DP における英語のプレゼンテーション能力に対する評価が大きい。一方で、PYP・MYP については、どのくらい英語教育いける成果があったのか、という疑問も寄せられた。

日本の中での IB 校の連携強化としては、特に一条校とインターナショナルスクールとの連携強化についても、非常に関心が高いという認識ですので、今後、取り組みが必要なことだと考えます。

荻野構成員:

ここ半年以内で、2,3の自治体の教育庁、教育事務局の方の訪問があり、何よりも授業を見てみたいとのご要望だった。新学習指導要領が導入され、何を知っているか、から何ができるようになるか、のコンピテンシー重視の学びがますます必要とされるようになったが、一方で現場の先生がたは苦労されている印象。IB 教育のプログラムでは、新学習指導要領との読み替えなど、カリキュラムマネジメントを普通に行ってきている。それが、IB 校以外の学校でも通常の授業をするにあたり必要になってきており、現場で必死になって導入しようとされている先生がたほど、IB校で実施されている事をご覧になりたがっている。IB 認定校が、我が国において果たすべき役割は非常に大きいと考えている。

坪谷構成員:

今までの活動に敬意を表します。3点申し上げます。

- 1点目は、IB 校がその地域の研究校として位置づける。IB 認定校にする計画があるかないかという視点を超えて、それぞれの地域のロールモデルと位置づけ、そこでの活動、研究成果を共有いただきたい。
- 2点目は、大学入学審査について、世界の大学がどのように IB スコアを利用しているか。どのようなデータを利用しているかなど丁寧に高等教育機関にお知らせしていく事が必要。高校における進路指導、キャリアカウンセリング、カレッジカウンセリングのモデル作りも今後必要になるかと思う。
- 3点目として、DPの2科目縛りについて。日本人の思い込みとして、とかく英語の能力がネイティブレベルでなければ履修できないのでは、という理由で、フルディプロマ取得者数が伸びないのではないかと思われる。学校全体でIB教育に取り組むという視点を大切にし、特にMYPからの支援をおこなっていき、英語がネイティブレベルでなくても履修してみたいと思えるよう、Certificateを増やしていくなど、大都市圏の学校だけでなく地方都市のスクールでも成果をあげていける施策を検討いただきたい。次の5年間も是非よろしくお願い致します。

ダッタ構成員:

IB 教育への関心の広がり高まりを感じるものの、多くの大学で教育学部は概して保守的だという背景もあり、学部でなくグローバルセンターとして務めている。

IB 校の認定を受ける計画はないのだが、非常に興味関心は高いという人たちは多い。フルディプロマ取得のカリキュラムは、正直、一般向けの教育ではない。でも1科目でも2科目でも履修してみたいからやってみるという文化が、日本で広がって欲しい。

日本は国策としてフルディプロマが取れる学校を増やしたい、そのための予算だから、という縛りはあると思うが、一方で高い予算をつぎ込んでフルディプロマのカリキュラムを用意したが、それを取得する生徒が非常に少ないとなると、それはどうなのか。ニーズ(興味関心の高さ)が現実にあることが分かっているのだから、フルディプロマは取れなくても1科目でも2科目でも履修したいと思う生徒がいて、履修できる環境があるのであれば、できた方が良い。

また例え科目が限定されても、大学入試において、そのような学びを経験した事をじたい大学側が評価する仕組みがあれば素晴らしいと思う。

日色構成員:

5年間ありがとうございました。

企業のプロジェクトでは、そもそもの原点・目的観に戻ることが多いのだが、なぜ目標を200校としたのか。スピード、ダイナミズムは到達しているのか、ということを今後の5年の取り組みを検討する前に一度立ち返ってみてもよいのではないかと思います。

いろいろな視点があったが、結局は日本社会において議論になっている課題やプライオリティとの綱引きになる。 つまり 教育の観点からここだけで議論していても、財政において教育以外にもリソースの綱引きがある以上、その中で IB 教育 をどう推進し続けるのかという事を検討しない限り、ダイナミックな成果達成は期待しづらい。

内閣府では、海外から高度人材を日本に連れてくること、それを投資の呼び込みにしようなどという議論もある。やはり教育の問題がボトルネックとなっており、つまり海外から優秀な外国人を受け入れる学校が日本にない。

例えば、熊本では半導体誘致がブームになっている、自治体・企業をあげて高専なども巻き込んで人材育成が盛り上がっている。ターゲットアプローチ、ゲリラ戦法という言い方が正しいかわからないが、ある面では時流にのった活動などの 視点も必要ではないかと思う。

岩崎構成員:

活発なご議論をいただきありがとうございました。

私からも2点申し上げさせていただきます。

運営側の意見として、議論をしていただきました先生方、事務局に感謝します。目的・方向性にそった戦略的な議論ができたかと思い、刺激的でございました。それぞれの立場・異なる経験を有する人が、オープンに忌憚なく議論され、新たな知見を得る事ができ、これからの日本の教育に貢献できる議論がなされたかと思っております。

次に教育学の研究の観点から、IB 教育は非常に完成度の高いものだと考えています。それぞれの IB 校を地域のロールモデルに、1 部科目の履修をその可能性の起爆剤に、などというご意見も、坪谷構成員・ダッタ構成員からいただきましたが、例えば、アカデミックスキルだけでなく、CAS などの教室を超えた活動は、新学習指導要領でいうところの「社会に開かれた学習」をさらに発展的に具体性をもたせたものであると考えられます。結果として、自発的に継続的に自ら学習できる能力が身に着くわけですが、これは昨今、企業においても重視される能力であると伺っています。

また生涯にわたって学習する力が、変わり続ける社会で生き続けるための戦略的能力となり、それぞれの個人にとってのセキュリティネットとなりますが、その力を身に着けるプロセスが IB のカリキュラムに組み込まれています。今後も各構成員が、各所でIB教育の素晴らしさを伝えていく貢献をさせる事を強く期待します。5 年間ありがとうございました。

文部科学省 出口室長:

様々なご意見をいただきましたが、有識者会議でのご意見と重なるものも多く、今後につなげていく必要を強く感じました。3月14日第4回の有識者会議の概要資料からご報告致します。 資料2の説明

青木構成員:

コンソーシアムの立ち上げから関わらせていただきました。

IB はやってみると学問的で、各教科の教員はかなり高度な学識を求められる。WS も海外のものに参加すると、学者の集まりのような情報交換が活発におこなわれる。今後、IB 教員が、学び直しができる仕組みやネットワーク作りが必要になると思われる。IB 教育はなにかと手法に注目されがちだが、そのコンテンツになるものは各教科を教える教員のレベルの高さである。

我が校は、海外進学をメインでやってきたが、そういった面でもまだまだ日本の一条校どうしのネットワークが弱いと思われる。行政の積極的な支援を期待する。

星野オブザーバー:

IB 導入検討の支援業務では、IBO・IB 認定校のみならず、IBAJ など、様々な連携ありがとうございました。

IB 一貫校のインターナショナルスクールが、一条校を支えてくれたことに感謝している。一条項と非一条校をの数が逆転した。

DP にフォーカスしてきたが、PYPも盛り上がっている。

7月からの会計年度だが、その前の候補校申請より倍以上の申請がありました。感謝しています。

IB 校の数を増やすのみならず、質の向上を考えている。CP であったり科目履修であったりと全公立、小中で購入したいとのことでした。数を増やすといことでは、地域にぽつんと 1 校、存在していることろもあるが、その地域で、PYP、MYP、DP と繋がるような普及促進をしていいきたいと思っております。

前田オブザーバー:

日本では IB 教育は英語教育、エリート教育と思われていた時期もあったが、手に届く教育という印象に変わってきた。

学校数も増えてきて、ネットワークができた事と思います。このネットワークは大きな財産であると考えておりますので、今後も積極的に活用いただける事を期待します。

コンソーシアム事務局長 小澤:

皆さまこの5年間ありがとうございました。IB教育のコミュニティの皆さま、文科省とIB機構の関係者の皆様と協働させていただけました感謝しております。

事務局に与えられた役割として、IBカリキュラムの周知、また実際に IB 校で先生方の指導や、学生や、企業にどのように活躍しているか、教員養成など様々なスポットライトをあてて、好事例を届けて参りました。このためには HP などで情報プラットフォームや、諸課題などのアクションプランを考えていかなければなりませんが、このレガシーを次の 5 年に引き継いでいただければと思います。私自身ももともと IB 教員でもあり、IB コミュニティに属する一員として貢献していければと存じます。

理事長柴田:

岩崎先生をはじめ、坪谷先生、日色先生、星野先生にも、初年度から皆勤で 5 年間お世話になり御礼申し上げます。 200 という大きな数は重責ではありましたが、達成し、今後は「質」であるかと思います。コロナ、地政学的進行など、IB 教育がとりあげてきたことが急速に普及していきている。地球が意識している様々な課題を子どもの頃から考えることは大切かと思います。今後の流れを感じているところです。

岩崎構成員:

文科省としても様々なご意見を貴重なものとして留めていただければ幸いです。 ありがとうございました。



	コンソーシアム事 (ホスト) 🚹 💿	•	
小	小澤_コンソーシ (共同ホスト) 💿	Ý	
((傍聴)経団連事務局	Ý	<u> </u>
((傍聴) 国大協 伊藤・曽我	<i></i> %	<u> </u>
Q	(傍聴) 私大連 斎藤	¥	<u> </u>
АН	Ayumi HOSHINO	¥	[24
	Daniel Reynolds	Ý	[24
岩崎	Kumiko Iwasaki	Ý	<u> </u>
ND	Natsuko Deguchi_JAPAN	¥	<u> </u>
PT	Principal, TGUISS	Ý	<u> </u>
TH	Tamotsu Hiiro	Ý	
	コンソーシアム事務局	¥	<u> </u>
遠	遠藤みゆき (関西学院大学)	¥	[24
教	教育学部@岡山理科大学_ダッタ	¥	<u> </u>
弘治	弘治 末吉	¥	
私	私大連 井川	Ź	M
坪	坪谷ニュウエル郁子	Ý	M
文	文科省	%⁄	M